ワンポイント・ブックレビュー

栗原　聡 著『ＡＩにはできない－人工知能研究者が正しく伝える限界と可能性』
角川新書（2024年）

ＡＩが目覚ましい発達を遂げている。最近では、生成ＡＩの一つであるChatGPTが世間の注目を集め、人々が手軽にＡＩを利用できる時代となった。その一方で、ＡＩのリスクに対する規制をめぐる議論も活発化している。本書はChatGPTなどのＡＩの成り立ちや特徴、その限界と可能性について解説している。

仕事や生活において ChatGPT の活用を検討している人も多いだろう。本書を通じて、ChatGPTの活用についてヒントを得ることができる。ChatGPT がこれまでのＡＩと異なるのは汎用性の獲得にあるという。例えば従来のＡＩは自動受付など特定の環境で利用される用途限定ＡＩであったが、ChatGPT はすべての問いかけに対して回答してくれる汎用ＡＩである。その一方で、問いかけが無ければ動作することはなく、どのような機能を選び、どのように問いかけるかはユーザー自身が決める必要がある。つまり自律的ではなく汎用的なツールである。汎用ＡＩを使いこなすためには、問いかけの仕方（プロンプトの書き方）のノウハウが必要になることが述べられている。

ChatGPT を始めとするＡＩの活用における限界も知ることができる。本書によれば、ＡＩの主たる用途は効率化であり、現段階では人間のように何かをゼロから創造するのは難しいという。例えばChatGPTは学習した大量のデータに基づいて回答を引き出す。そのため当然ながら学習した範囲外の回答を生み出すことはできない。

ＡＩが苦手なその他の点も紹介されている。ＡＩには膨大な知識が詰め込まれているが、人間のように五感を駆使し、その場の状況に適応した判断を行うことができないという。創造力、状況認識能力、共感性、感性、コミュニケーション力などは、まだＡＩが苦手とする領域であることが述べられている。そして今後ＡＩが道具型から自律型に発達したとしても、自律型の目的を設定するのはあくまで人であるという点で、やはり人がＡＩを介するという流れは変わらないことが説明されている。

本書を通じて現状のＡＩに何ができるか、または何ができないかを把握することができる。現状のＡＩはツールであり、ＡＩ自らがユーザーの気持ちを察して、意図を汲み取り、回答を自動的に提供してくれるものではない。しかし、ユーザーが新たな価値の創造やイノベーションを模索するうえで、ＡＩの利用は大きな助けに成り得ると思う。

またＡＩの利用にあたっては回答の信頼性の検討や、プロンプトの書き方のスキルも重要になってくる。今後もＡＩは間違いなく発達し、手軽に利用できる時代になっていくと思われる。その一方でＡＩを使いこなすためには、ユーザー側も知識を身に付け、スキルを向上させていく必要があるといえる。（中川　敬士）